

環 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	5
瑠璃集	8
瑪瑙集	15
紅玉集	17
光耀抄月評	19
総合誌の窓	22
恵贈俳誌散見	24
琥珀集作品鑑賞	26
瑠璃集作品鑑賞 I	27
II	28
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	29
京のおばんざい	31
西国街道の峠	32
近江八景	33
安見児と不比等	34
ならまち吟行記	36

今月の一句

浜木綿に星夜の火山灰よなの降る音す

桂 樟蹊子

(昭和十一年作)

「櫻島の南麓に当時一軒の宿があつた。付近には浜木綿が群生していた。星の美しい夜のことである、時々はらはらと火山灰が降る音がした」という。遙かな旅路のなかに畿内では味わえない旅愁を感じられたに違いない。調べの良さは秋桜子譲りであろうか。リズムのいい、しかも下五の止めに感動があふれている。

塩路 隆子

蛍の恋路

塩路隆子

「醜の御楯」信じたる日の蓮華草

百千鳥鳴くや神杉膨らませ

岬端の風に喜ぶ美人草

墓生涯弱気吐きませぬ

若葉風死ぬ気なけれど死の話

琉金のやうなフアツション薄暑かな

麦秋や端山の掲ぐ星ひとつ

野暮かしら蛍の恋路見届けむ

七月号光耀抄

塩路 隆子選

黒鯛跳ねて活けの一刀躰はしけり
花筏三井の疏水を起点とし
まみえたる釈迦の半眼若葉風
しゃぼん玉過去も一緒に消しました
そよ風が運びたる幸花菜漬
芦毛馬逃げおほせたり臯月賞
はんなりを決める紹の帯あて姿
神杉にひしと絡まる登り藤
初夏の雁木を洗ふ小波かな
五月来てゆるり行く贅手こぎ舟
すかんぽを噛みつつ渡る天井川
行く先を決めずバス旅春うらら
メンバーはほぼメタボ系夏帽子
信濃路は百花繚乱春うらら

小澤 菜美
竹内 悦子
前川ユキ子
森下 康子
伊東 和子
宮田 香
松田 和子
笠井 清佑
高谷 栄一
谷沢 秀子
中川すみ子
難波 篤直
日山 輝喜
増田 一代

櫻蕊降る白川やかにかく碑
春暮るる姉三六角とうふ笛
ビル街に癒しのピンク花水木
古民家のエコ体験や春深き
旅人と遅き湖北の春惜しむ
茶摘唄聞えて来そう宇治の町
貧困の時になつかし昭和の日
意気のいい江戸の泥鱈屋下足札
裾広きスカート翩る初夏の風
親鸞の生誕の里風薫り
緋牡丹の崩れし闇の深さかな
還曆にリラの風ある朝かな
春風に僧の快走バイクかな
殿と声つなぎゆく躑躅坂
落書を殖やせふやせと蜷親子
銀輪の少年剣士柿若葉
西陣の古き料亭鱧の膳

松田とよ子
宮崎左智子
山下 潤子
吉波喜久恵
山口キミコ
飯田美千子
井口 淳子
池田加寿子
伊庭 玲子
宇治 重郎
岡 佳代子
片岡久美子
桂 敦子
紀川 和子
久保田美智子
北村 美幸
坂上 香菜

おぼるなり鳩の杭立つ夕月夜

太閤の天守を望む花の宴

行く春や夫の納骨袋縫ふ

どんつきの蛍の夕べ智積院

今ごろは爛漫絵巻花の寺

筍にありしとどめの鍬の跡

老いの身に為すことあらむ桐の花

婦女子らの小さき賭けごと春競馬

古池の闇の深さを牛蛙

砂埃舞はせて加茂の競べ馬

葱坊主小さき拳の天を突く

アスファルトたんぽぽラブラブうれしそう

たんぽぽのわたげふきふき通学ろ

たんぽぽが両手をひろげあまえてた

ぼくの教室マリーゴールドいっぱい

いんげんのはつがは元気いっぱいだ

笹井 康夫

杉野原弘幸

杉本 綾

鷲見多依子

曾我美代子

山岸 邦

西垣 順子

山本 孝夫

山本 千里

坂根 宏子

笹田 浩朗

中森 圭那

廣瀬 結麻

高野 綸

塩路 彩人

塩路 翔

琥珀集



花巡り

竹内悦子

花筏三井の疏水を起点とし

快き揺れよ海津の花見船

花盛り神を崇^{あが}めて五十鈴川

楊貴妃の名をほしいまま花の昼

能舞台にジャズの演奏花月夜

軽快に回す轆轤やみどりさし

轆轤台止めて新茶の香を賜ふ

茅花の穂

小澤 菜美

茅花の穂しらしら沖の荒れ兆す

棟咲き話し相手の欲しくなる

タイムスリップ黒きドレスに更衣

黒鯛跳ねて活けの一刀躲しけり

穂の芽を掻きての夕餉藪昏るる

「鹿尾菜煮て元気でゐます」島の友

久闊の人との訣れ百合薫る

釈迦の半眼

前川ユキ子

総身を駆ける神水夏始

初めての紺色スーツ聖五月

をんな旅しゃべり疲れの夏蜜柑

湖山の神御座します夏霞（山王祭）

みどりさす女人高野の太鼓橋

鐘の音や水面に映ゆる青楓

まみえたる釈迦の半眼若葉風

等等力溪谷

森下 康子

更衣

塩路 五郎

大都會の中にオアシス緑なし
一丈の滝が迎へる溪の茶屋
ローカル線で駅弁の旅麦青む
足利の藤の世界に酔ひにけり
白藤のトンネル人の波絶えず
貴婦人の香り仄かに藤の花
しゃぼん玉過去も一緒に消しました

更衣品格までは変へられず
睦五郎戯け顔なる面構
万緑や野山に力漲れる
猿沢の池の春愁亀泳ぐ
筍に思はぬ深手負はせけり
岸壁の母のことなど母の日に
飛火野の大樹の蔭に孕鹿

花は葉に

伊東 和子

仔馬

宮田 香

そよ風が運びたる幸花菜漬
花の山暮れてひと日を有難う
みどり立つ故山の起伏少年期
文庫本頁そのまま春眠し
塔裏は夕日斜めに山桜
木の芽あへ和食でとほす夫なりし
うつろへる人の心や花は葉に

春愁ふ聖火の通る信州路
笑ふ山バックに鹿の絵看板
鐘楼に泳ぐ古典派鯉幟
奈良町の古き眼科へ春日傘
芦毛馬逃げおほせたり臯月賞
母を追ふ仔馬の走り真価問ふ
帽深く泣き顔隠す五月病

聖五月

松田 和子

奈良ホテルの誇る景観聖五月

目に青葉風心地良きティータイム

散策の緑鮮やか浮見堂

九重桜誇る老舗や鹿たむろ（料理旅館江戸三）

薄物の針軽やかや和裁塾

憧れの絞りの浴衣身に添わず

はんなりを極める紵の帯あで姿

楠若葉

三川美代子

新緑の風に曝され観覧車（休業中の観覧車）

山里の大樹の歴史楠若葉

花筏ライト・アップの一隅に

湖風に風車ゆるりと回り初む

ハンカチの花鮮かに風を待つ

狂言の余韻を抱き若葉径

初蝶や還暦祝ふりサイタル（竹林秀憲フルートリサイタル）

八重桜

能勢 栄子

連休の果てて孤独よ五月雨るる

囀を聞きつ朝寝や贅独り

八重櫻通り抜けてふ人の波

春うらら高層ビルのバイキング

山寺を埋め尽くせし紅躑躅

五月晴友と訪ひたる野草展

薫風やトランペットを空へ向け

登り藤

笠井 清佑

麦秋やボサノバ昼にひとり聴く

神杉にひしと絡まる登り藤

草いきれ若者の声弾け飛び

えごの花老人多き町となり

葉桜や不機嫌時代問はるる世

万葉の植物園や麦熟るる

植物園の奥処を飾り藤の花

瑠璃集

恋の予感

田中 浅子

風に揺れ恋の予感のチューリップ
朝掘の筍を盛り朝の市
手作りの露味噌添へし昼餉かな
山吹の日ざし斑や道祖神
柔らかな春光浴びし乙女像

みどりの風

高谷 栄一

山桜透きてゆるりと飛行船
花明り役行者の像癒やす
幕明きを都をどりのよーいやさー
唐崎の松やみどりの風そよぐ
初夏の雁木を洗ふ小波かな

身代り猿

田中 芳夫

身代り猿郵便局にゐて長閑
花蕊降る中将姫の親子墓碑
袋角柵越しに欲る鹿煎餅
浮見堂背山のみどり濃く淡く
薫風に古るる焼杉奈良格子

花の旅

田下 宮子

サハリンを遥かに夏の潮さわぐ
函館のハイカラ号や花の旅
シャンデリア輝く春の舞踏会
讚美歌のトラピスチヌや花明り
北なる地アンネゆかりの薔薇ひらく

ゆるり行く

谷沢 秀子

五月来てゆるり行く贅手こぎ舟
彼の女の嫁入り水路行々子
船頭の齢八十路や二輪草
現し身を水面に映し春深き
天才も一途ならこそ花大根

光耀抄七月月評

塩路 隆子

黒鯛跳ねて活けの一刀躰はしけり

小澤 菜美

黒鯛ちぬめは体が薄黒く銀色をおびているところから、赤鯛（真鯛）に対して黒鯛と呼ばれている。古来大阪湾を茅沼（ちぬ）の海と言ひ、そこでよく採れたからこの名をつけたと言う。黒鯛が肥って脂がのるのは真夏であり、洗いや塩焼きが特に好まれる。磯釣りとして一本釣りのほかに刺網、投網などを用ひ捕獲される。印象としては他の鯛よりも身がしまっていて美味しく、活け魚としても他の魚よりも精神な感じを受けるのが黒鯛である。首のあたりに包丁を当てることによって、うまく血抜きが出来て死後も新鮮さが保てるようである。

作者の目の前で黒鯛はいまどめの一刀の洗礼を受けようとしている。「俎板の鯉」とは観念をした鯉であるが、黒鯛は本能的にそれを跳ねのけて難を逃れたという。

見ていた作者も安堵の瞬間を得られたのであろう。ほつと胸をなでおろした一瞬をうまく捉らえた句として評価したい。

まみえたる釈迦の半眼若葉風

前川ユキ子

与謝野晶子の歌に「鎌倉やみ仏なれど釈迦牟尼は美男におわす夏木立かな」というのがある。晶子らしく、當時としては斬新な歌である。俳句でも仏像を詠むとえてして、抹香くさい句になってしまい、古くさい句に仕上がる場合が多い。最近作者は、吟行句に挑戦していると思う。努力が報われた句を得られたのではないだろうか。

「まみえる」とあるから訪れた寺の本尊であろうお釈迦さまの半眼を印象的に捉えている。若葉風をいかにも心地よさそうに受けている姿、眺めている作者も同じ若葉風を受け、そのお姿と対峙している様子をひしと感じる。「若葉風」が動かない季語としてこの句を支えている。

しゃぼん玉過去も一緒に消しました 森下 康子

すぐれた心象句として取り上げた。人として生きて行くのに、多い少ないはあるが何事もなく生涯を過ごせる人は殆んど無いだろう。苦勞をした人が却って人に優しく、人の痛みを理解できる大きな人間に成長すると言う。格言には「苦勞は買うてでもしろ」と言われたが矢張り苦勞はしたくないのが本心であらう。

作者はしゃぼん玉を吹いている。そのはじける時の思い切りのよさ！。それを見ていてこんな風に思い出した

くない過去をすっかり消してしまいたい、と思われたのであろう。そうは行かないから人間は悩むのである。「過去も一緒に消しました」は作者の要望であり、願望であるのかもしれない。人間の悩みは果てしない。煩惱の深い人間世界に於いては、それは過去でなく今現在かもしれないが、どうかその悩みを乗り切っていただきたい。思い切りよくしゃぼん、玉がはじけるように。(以下略)